

Saul Bellowの短編を読む—“The Old System”

大工原 ちなみ

富山大学人文学部紀要第58号抜刷

2013年2月

Saul Bellow の短編を読む—“The Old System”

大工原 ちなみ

Saul Bellow は、比較的多作な作家で中・長編小説をたくさん書いているためか、多くの短編を書いているにもかかわらずその評価はあまりなされていないように思われる。事実批評書においても短編が大きく取り上げられているのは、Daniel Fuchs, *Saul Bellow: Vision and Revision* や Robert F. Kiernan, *Saul Bellow* などごくわずかといいよい。しかし、短編には長編小説で Bellow が一貫して扱ってきた、生と死、ユダヤ教と現代的生き方の相克、といったテーマが凝縮された形で示されていることが多い。この小論では、それらのテーマが如実に示されている “The Old System” をとりあげてみたいと思う。

“The Old System” は 1967 年に出版されている。Bellow の作家としての生涯を考えてみるとこの時期は中期に当たり、作家として最盛期を迎えようとしている時期と重なる。その前後の作品を見ると長編では、1959 年に *Henderson the Rain King*, 1964 年に *Herzog*, 出版後の 1970 年に *Mr. Sammler's Planet* があり、短編では、1955 年に “A-Father-to-be”, 1957 年に “Leaving the Yellow House”, そして翌年の 1968 年に “Mosby's Memoirs” となっている。“The Old System” は、直後に出版された作品よりも 10 年前に書かれた *Henderson the Rain King* や “Leaving the Yellow House” と対照的な形ではあるが密接な関係にある作品というのが大方の批評となっている。身近に相次いで現れた死の兆候から逃れるため、生命力あふれるアフリカへと生を求めて旅立った Henderson。晩年を迎え迫り来る死を意識しながらもまだ受け入れる覚悟ができない “Leaving the Yellow House” の Hattie。この 2 つの作品にみられた生と死のテーマは、“The Old System” に色濃く受け継がれているのである。

生と死の物語

Saul Bellow はほとんどの作品において死の問題を扱っている。“Leaving the Yellow House” の中で、老女であるヒロイン Hattie はそう遠からず自分に訪れるであろう死を意識し、唯一の財産である黄色い家を遺すために遺言状を作成しようとする。彼女は家を譲り渡す相手を模索するが、結局は自分に家を遺贈するという趣旨の遺言しか書けず、死の受容を拒否している。また、“The Old System” の翌年に書かれた “Mosby's Memoirs” では主人公の Mosby に、「もう一度奇妙で複雑な幻想を体験していた。そこでは彼は死んでいた。そう死んでしまっていたのだ。それでいて、生き続けていた。彼の運命は、死に至るまで Mosby として生きることだった」(171) という死の幻想体験をさせている。ここでも主人公は死を強烈に意識しながらも、生に

執着し生き続けることを選択している。

さて、“The Old System”では、冒頭に語り手である Braun 博士が登場する。彼は人生の晩年を思わせる 12 月の末日に、今は亡き二人のいとこ、すなわち主要登場人物である Isaac Braun と Tina Braun という兄妹についての思索と思い出に耽っている。

一見死者の世界にどっぷりと浸かっているかに見える Braun 博士ではあるが、直後には、立ち上がり口をゆすぎ歯を磨き入浴するという生の営みである日常行為を行っている。その後、台所に行き朝食を取るが、「新しいコーヒーの缶を開け、穴の開いた缶から立ち上る香りを大いに楽しんだ。香りは一瞬なので逃してはいけない。続いてトースターに入れるパンをスライスし、バターを出し、オレンジをかじった」(46)とあるように、そこには明確に生の香りが立ちこめていることを見過ごしてはならないだろう。すなわち作品の冒頭で生と死が平行して描かれているこの物語は、そのまま生と死の織りなす構成となっていく。

そもそも“The Old System”は物語の形式からして、死者である二人のいとこに対する Braun 博士の回想録の形を取っている。なぜ死者である二人に執着するのか、Braun 博士自身が分析している。それは幼い頃より 15 歳年下の彼をかわいがってくれた Isaac Braun に対する変わらぬ愛ゆえであり、しかもその愛は「Isaac が死んでいるからこそ一層彼への愛は深まるのだろうか」(47)と語っているように死者への愛という形を取っているゆえに、「二度と会えない人間に対する憧れ」となり、「あの人達はもう死んでいるから甲斐無き愛」(104)という無償の愛になるのだ。Braun 博士は明白にこの死者への愛を意識する。その結果、「死者達を懐かしく思い出すという無駄な喜びのために、午後をすっかり投げ出す」(62)ことになり、Isaac とそれに付随する形で彼の妹である Tina のことを回想するのである。

この物語では回想の対象としての死者は Isaac と Tina の二人であるにもかかわらず、Isaac の死については死因にすら言及が無く、ただ死期が Tina の死後 2 年後と示唆されているだけである。従ってこの物語において語られている中心的な死は Tina の死であるといえよう。

物語の終盤で Tina は、末期の肝臓癌に冒されコバルト照射による治療がなされていたが、それすら容態を悪化させる要因になるというほど回復が見込めない文字通り死の床についている。妹とは絶縁関係にあった Isaac は、弟の Mutt を介して長年自分に対して憎しみを抱き続けてきた Tina に面会を求めるが、憎悪を理由に断られる。それでも兄として面会を求め続けると「どうしても会いたいなら 2 万ドル支払う」ように要求される。

不条理とも言える Tina の要求を受け入れて死の床にいる妹を見舞う Isaac は、Tina よりも年長であるにもかかわらず、まだ自分の死を意識していない。「妹の死の床へとゆっくり昇っていく」(78)病院のエレベータでも、一緒に乗り合わせた黒人の美女に我知らず目を奪われるほど生/性への執着が強いのである。彼は「60 歳になっていた。死への道筋を知っていた。自分もまもなく逝かねばならない。だが、知っているだけで、まだ今は感じてはいなかった。死は

まだ遠くにあった」(79)とあるように、“Leaving the Yellow House”の Hattie 同様死を受け入れるまでの境地には至っていない。

死の影に覆われ死を覚悟した妹とまだ死の影すら感じていない兄という生と死のコントラストが描かれているが、それは、美しい自然と汚された自然の対比にも形を変えて描写されている。妹からの面会に2万ドル支払うようにという理不尽で冷酷ともいえる金銭の要求を突きつけられた同日、換言すれば兄と妹の双方が明確に死を意識したその日、Isaac は、糞尿等の生活排水で汚れきり、「野蛮なスカベンジャーであるウナギだけが水を支配する」(70)ハドソン川へ河川汚水の調査のために視察に行く。案の定川は、「仮に今汚染を食い止めたとしても川を元に戻すには50年かかる」(70)状態であった。ハドソン川は現在も浄化への真摯な取組が続いているが、この作品が書かれた1960年代、ハドソン川の汚染が問題となっていた。GEが1947年から排出し続けていたPCB汚染をはじめ生活排水や産業排水等で水質が著しく悪化しており、1966年にはその指摘を受けて、Seeger等によるHudson River Sloop Clearwaterが設立され、70年代になると72年にClean Water Actが制定され、76年には川での漁業やレクリエーションの規制がなされ、77年にはPCBが禁止されるなど一連の河川浄化の動きが見られることになる。

確かにTinaとハドソン川は直接結びつきがあるわけではない。しかし、物語の中ではTinaからの2万ドルの要求のあと、Braunによるハドソン川の汚染の描写が何の脈絡もなく続いており、それはIsaacが回復の見込みもなく死の川と化したハドソン川を、死を待つばかりの妹と重ね合わせていると考えられないだろうか。ヘドロが溜まりウナギだけがはびこる川の様子は、癌に蝕まれたTinaの身体をも想起させるのである。

これと対極にあるのが、死とは程遠かったTinaの子供時代のエピソードである。アディロンダック山脈の美しい自然の中にある別荘に滞在中、当時7歳だったBraunはTinaにクローバーの花輪を作ってあげようとしてスズメバチに刺され発熱する。Tinaは、屋根裏に寝かされていた彼を見舞い、自分の身体で冷やそうとするうちに、性的体験と呼ぶにはBraunにとってはあまりに幼い体験をTina主導で持つことになる。

こけら板の屋根のくらくらするような暑さの下で、TinaはBraunの上に両足を置いて徐々に広がっていった。野卑で真っ黒な毛が見えた。内部の赤いものが見えた。彼女は指で褌を分けた。分けるとき暗い鼻腔が開き頭部の中で目は白く見えた。彼女は子供の生殖器を脂肪で平らになった太ももに押しつけるように身振りで示した。不能と喜びの極みで彼は従った。音一つなかった。夏の静けさ。彼女の性的なおい。(51)

Braunは回復後、今度はIsaacが婚約者のクララと親密な抱擁を交わしている現場を目にする。その後二人についていこうとするが追い払われ、Isaacに殴りかかるが、逆に押さえつけられると言うエピソードが続く。少年だったBraunの性への覚醒とTinaの性の欲求という人間と

して生きる上で欠かせぬ性という生きる活力が美しい自然を背景に描かれているのである。

Isaac の青年期も自然と結びつけて描かれておりその姿は、「全くもって旧約聖書的な意味において、男に生まれついていた。スズカケノキに止まっていたあの鳥（みさご）が水中の魚を捕らえるように生まれついていたのと同じように」（47）とあるように、モーホーク溪谷の一本の巨大なスズカケノキの枝に止まる「灰色と青のみさご」に喩えられている。

開発や公害に冒される以前の美しい手つかずの自然が、若く死とは程遠い関係にあった Braun 博士と Isaac, Tina の青春時代の生に満ちあふれたエピソードと重ね合わせて描写され、それとは対照的にヘドロが沈着しほとんど死の川と化したハドソン川と、癌に全身を冒されて死を待つばかりの Tina がオーバーラップしているのである。

Isaac が喩えられたみさごは、猛禽類に属し羽を広げると 1.8 メートル近くにもなるという。1950 年代には、DDT などの化学物質汚染によって北アメリカで個体数が減少し、絶滅の危機にさらされた。その後、DDT 等が使用禁止になり数は著しく回復したが、依然として個体数が少ないままの地域もある。物語の最終部で Braun 博士の Isaac に対する思いは再度「スズカケノキに止まっていたみさご」と結びつけられ、ここでは「羽よりは鱗の多い翼をしたいとこの Isaac」（76）という表現がなされている。ここでは恐竜から鳥へと進化したという理論を踏まえて、羽が象徴する進化形である鳥よりも鱗に示される恐竜の要素が強いということで Isaac が「古風なタイプ」（104）であることを示唆しているのである。無論のことユダヤの古い生き方を守る Isaac が現代にあっては絶滅危惧種のような存在であることも暗に示していると言えよう。

更に Isaac がアメリカに来たときまだ子供であったにもかかわらず、「旧世界のユダヤの尊厳が彼には力強くしっかりと身についていた」（47）と記されている。そこで次に Isaac のユダヤ的古風さに焦点を当ててみたい。

Isaac のユダヤ教的古風な生き方

ユダヤ的家長としての Isaac

この物語の中で Isaac は、威風堂々としたみさごに擬えられ「旧式なユダヤ人的家長」（55）といわれている。“Henderson the Rain King”，“Leaving the Yellow House” の中で、Henderson と Hattie という WASP を主人公に描いた Bellow であったが、この点において Isaac を家長とするユダヤ人一家 Braun 家の物語として読むことが可能である。“The Old System” はすっかりユダヤに回帰しているといえよう。Isaac は一家の長として、様々な面で家族への責任を果たそうと試みる。

Tina との間に決定的な憎悪関係を生じさせることになった投資への誘いも、家族に富をもたらそうとした族長としての判断であったといえよう。ロブスタウンにショッピング・セン

ターを建てる計画を立てて買収用地であるロブスタン・カントリー・クラブを会長で異教徒の Ilkington から 10 万ドルで買い取る際に、Isaac は、硫黄島で負傷し電気製品の商売をしている Mutt、公認会計士の Aaron という二人の弟に加え、Tina の夫で古物店を営んでいる Fenster を仲間に入れようとした。無論のこと、家族の長としてその交渉や重責を一人で担うつもりであった。

ところが Ilkington に会って取引をする直前になって家族に変節が生じる。Ilkington が脱税を考えていたため受領証がもらえないという点で正規の取引方法ではないことから、まず職業上の理由もあって公認会計士の Aaron が反対し、それに呼応するかのようには皆が計画反対にまわり投資から降りてしまった。これとは対照的に、Ilkington は取引の際に鞆に入れて差し出した Isaac の金を確かめることすらしなかった。異教徒との間には信頼関係が成立したのに、家族の信用を得ることは出来なかった Isaac は、「喪失感に襲われた—自分がユダヤ民族から、家族から取り残され、神にも見離され、アメリカの空虚の中に迷い込んだ気持ち」(59)になる。

結果的には、一人でその投資に賭けた Isaac だけが「百万長者」になり、他の者は要するに、「旧式な移民の流儀で蓄えただけ」(55)になった。とはいうものの、家族は「誰一人貧しくはなかった」(56)とあるように、皆決して貧しいわけではなく家長として手をさしのべる必要があるのに手をこまねいていたわけではない。しかし、とりわけ Tina は、そのために兄だけが富を手にしたという金銭的な嫉妬を増長させて兄に対する憎悪を募らせていったのである。客観的にみれば Isaac は、家族に富への可能性を示し誘った時点で族長としての義務は十分に果たしていたといえよう。

正統派ユダヤ人としての Isaac

Isaac は旧約的な家父長であっただけでなくユダヤ教徒として敬虔な人物として描かれている。「Isaac の正統派的信仰は、富と共に募るのみだった」(55)とあるように成功を収めた Isaac は「百万長者」(60)になっても「非常に質素に生活(60)」し、「朝の 6 時に、部下の連中を従えて出かける」(60)ほどで、奢ることなく勤勉であり、旧世界の深い信仰に基づいた生活様式を遵守していた。またそれを象徴するかのようには家族とは旧世界のユダヤ語であるイディッシュ語で話していた。そして、成功のシンボルとも言えるキャデラックのコンパートメントには「詩篇」を入れておき、踏切で長い貨物列車が通過する際に詩篇を唱えるほど寸暇を惜しんで信仰に励み、やがてユダヤ教会の会長におさまると、ラビに「謙虚に神と共に歩んだ」(60)と言わしめている。

彼のそのような側面は様々なところにみられる。たとえば、「死者を訪れ、生者を赦す一人を赦し、人に許しを請う」(66) 行事である贖罪の日には、必ず両親の墓参りをし、その足でいつも Tina に赦しを請うために出向いていた。また、オルバニーからわざわざ列車で半日掛

けて、Williamsburg のラビのもとへ Tina から請求された 2 万ドルの「接見料」の件で相談に行った。「彼は、Williamsburg にラビがいた。それほど彼は正統派ユダヤ教徒だった」(72)と説明されているように、多くの正統派ユダヤ人が移民先として選び古い生き方を遵守しながら住んでいる Williamsburg の宗教的指導者にわざわざ指示を仰ぐ点にも彼の敬虔さが見て取れよう。

その彼の生き方を身近で支えていたのが、夫人であった。彼女は、人前に出るときに差す口紅以外は化粧品も使用しないし、金持ちの夫人のシンボルとも言えるミンクのコートも身につけない。夫を主人として立て「意識的な批判や反対はわずかなりとも一切せず」(64)家事一切を夫の基準に合うように切り盛りする「1939 年にヒトラーとスターリンによって完全に破壊された一つの東欧の模範に基づき、素朴ながら、豊かで古風な尊敬すべき家庭生活」(86)を築いていたのである。

以上のように Isaac は、アメリカ社会の中で、敬虔なユダヤ教正統派信者として生き、家族にあっては、ユダヤ的な族長としての責務を果たそうとしていたのである。

現代的な生き方との相克

この Isaac のますます旧式すなわち “the old system” に偏ろうとしていた殻を破らせたのが、他ならぬ Williamsburg のラビと Tina であった。Williamsburg のラビと弟子達は、「ドイツ軍によるホロコーストの生き残り」(73)であり、ラビは子供の頃にその経験をし、戦後、オランダとベルギーに住んだ後フランスで生化学を研究していたところをラビとして「ニューヨークで精神的義務を果たすよう招喚」(73)されたという経歴を持つ。

兄妹の事情を理解したラビは「妹さんはおかわいそうですが、実に厳しいし、間違っています。あなたに不満を抱く根拠は何もない」(74)と Isaac の正当性を認めつつも、家族が投資から降りた時、あなたは「見捨てられた感じ」がしたかもしれないが、「幸運」でもあった。そのために家族に「利潤を分ける必要がなくなりそのために金持ちになったのだから」(74)しかも「あなたは男です。彼女は女でしかない。しかもあなたは金持ちです」(75)と妹の理に合わない恨みにも一定の理解を示し、裕福な兄として妹を救う責任があることを示す。その上で、そもその発端となった取引の際に、異教徒である Ilkington を信用して 10 万ドル支払ったのであれば、2 万ドルを Tina にやれる余裕があるのなら、折れて妹に金を渡すようアドバイスする。それを聞いた Isaac は、「これまでずっと、あの金額を払わねばならぬとわかってはいた。ラビに相談して意を強くするために来たのだ。律法や叡智が味方してくれた」(77)と述べている。

ラビのアドバイスは果たして本当に律法と叡智に象徴されるユダヤ教の古い考え方のみに基づいたものであったのだろうか。ラビは「帽子をかぶり髭をのばしギャバジンの服」(76)という服装や身のこなし話し方など申し分のない正統派ユダヤ人であったと記されているが、Isaac

は「何か異質なもの、つまり現代風のもの」(76)を感じ取っており、それは彼が生化学を学んだことに由来することが示唆されている。

その後 Isaac は帰途につくが、長時間掛けて汽車で来た往路とは異なり「これまで一度も空中を飛んだことはなかった。しかし今こそ飛ぶ潮時なのだ」(77)と飛行機で帰ることに決める。これは彼にとって古い枠から一步踏み出す行為であったと言えよう。その一步を科学者の考え方を併せ持つラビが後押ししたと言えないだろうか。その後、飛行機が離陸した時、「聞け、イスラエルよ。われわれの神、主は唯一の主である」(78)という神を称える言葉が口をついて出てくる。この言葉は旧約聖書「申命記」6章4節の言葉であり、それに続く「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」と共にユダヤ教の根幹をなす教えの一つである。ここにいにしえの知恵であるユダヤ教と現代の知恵である科学の融合が示唆されているように思われる。

それでは Tina の方はどうであろうか。彼女は子供の時から Isaac を嫌悪しているが、とりわけ彼の「正統派的卑屈な態度が大嫌い」(66)と公言している。死を間近に控えた妹に会いたいという兄の切なる願いを拒んだときの Tina の心情は Braun 博士によって次のように分析されている。

いとこの Tina は、人は古い規則に縛られる必要はないということを発見した。妹の顔が見たいという痛切な望みが拒まれたので、これまでとは全く違った一步進んだ理解、苦痛かもしれないが昔のものより真実に近い理解をせねばならないのだということを。今死の床にある彼女は、こんな考え方をせよと指図しているようだった。(92)

ここで Tina は「昔より一步進んだ理解」に達するために、すべてを変えるように兄に示唆しているというのである。Williamsburg のラビが無意識的だったにせよその科学的スタンスによって現代的生き方に迎合するよう示唆したのに対して、Tina の方は科学とは正反対に位置し、旧世界のユダヤ人達を特徴付けるものとも言える激しい感情によってそれを行ったと言えよう。

感情による対立から融和へ

Isaac はかつて、10歳の Braun に対して、「Braun 家はナフタリの種族の子孫であり、そのことを忘れないように」(66)と言っている。ナフタリとは旧約聖書「創世記」に登場するヤコブの第6子で、ラケルの女奴隷ビルハとの間に生まれた子であり、ヘブライ語で「我が戦い」を意味する。“The Old System” は、Isaac と Tina の愛憎関係を中心に話が展開しているが、ナフタリの子孫であることを証明するかのように、彼らの両親も含め Braun 一族は激しい感情の対立をうちに秘めていた。

Braun 博士は、Isaac の父である Braun 叔父が、妻である Rosa に怒ったまま「最後の息で彼

女の過酷さを叱りつけたまま、壁の方に顔を向けた」(69) 状態で死んだことを記憶している。その死の床で Braun 家の女達は、彼の死に対してではなく思った程財産を分けてもらえなかったことに対して涙を流すのである。Isaac の母であるローズは、遺産がほとんど自分には遺されなかったことに怒り、息子達に遺された貸家の家賃を集めて自分名義で銀行に預金したほどであった。そこにみられるのは、金欲に駆られた怒りの表出であり、通常みられるような母の子に対する無償の愛の姿はみられない。

Isaac の母の Rosa と妹の Tina は、Cronin 氏が定義づけるところの “dreadful mothers, destructive wives and lovers” の範疇に入っていると言えよう。Braun 家の戦いの底流には常に金があるように思われるが、さらにその恐ろしさを形成しているのは怒りや憎悪等の形を取って剥き出しで表出される感情なのである。

物語の冒頭で Braun 博士は、「自分を冷ややかな目で眺める不健康な態度を身につけた」「文明人」は、「芸術から自己観察と客観性を楽しむことを学んで」(45-6) おり、その結果、「精神の高揚や美」は、「引きちぎられて女の子の洋服につけるリボン」(46) のようなお飾りと化していると述べている。Braun 博士自身が科学者であるところから、感情を表出することに対して嫌悪感を抱いていると考えられ、そのことが自分の感情を剥き出しの形で表現する Tina を「当世風のスラングを使っていたにもかかわらず、Tina も時代遅れの存在になっていた」(62) と、古いタイプの人間に分類する所以にもなっている。

現代にあって兄に感情をぶつけた Tina は、「死の力を利用して、オペラを思わせるような情況を創り出し」(69) どうしても会いたいなら 2 万ドル支払うように要求したと Braun 博士は分析している。その行為は、「嘲笑のフィードバック」(69) と補足されており、憎み続けてきた兄に対する嘲りだけでなく、自嘲の意味も含まれているのである。

Isaac は、妹に 2 万ドルを渡すことは、妹に対して罪を認めることであり、妹の意図もまさにそこにあるのだと考え思い悩んでいたのだが、いったん彼女に 2 万ドル—その 2 万ドルという金額は Isaac にとってさほど無理なく支払えるぎりぎりの金額であり、Tina は抜け目なく選んだものだと彼の苦笑を誘っているが—を渡すとそれまでの苦悶はすぐさま止まる。

Tina の方も金の入った鞆を払いのけ受け取ろうとしない。

「いいの。受け取って」。彼は行ってキスをした。彼女は自由のきく方の腕を上げて、彼を抱擁しようとした。彼女はあまりにも弱っていたし、麻酔が効いていて、抱擁は出来なかった。彼は肥満体だった妹の骨を感じた。死。終わり。墓。二人は泣いていた。そして Mutt は、ベッドの足下のところに立ったまま、顔を背け、口をねじ曲げて開き、目からは涙を流していた。Tina の涙はずっと豊かで、ゆっくり落ちた。(80)

涙によって憎悪がすべて洗い流される中で、Tina は金を受け取らなかったばかりか、「お金ではないの。これは要らないわ、ママの指輪を受け取ってちょうだい」(80) と言いながらやせ

細った指にデンタフロスでやっと止めてあった指輪も返す。

ここでこの指輪の来歴について述べておきたい。この指輪は Isaac がかつて借金のかたとしてあるユダヤ人から受け取った指輪であり、当初は無価値と思われていたが、実は高価なものであるとわかり、母に贈ったものである。母の死により Isaac の妻の手に渡るはずであったが、Tina が死んだ母の指から抜き取り、Isaac や妻の抗議もむなしく彼女のものになったと言う経緯がある。ここには、Tina の富に対する、それも兄の富に対する激しい執着が見て取れよう。しかし死を前にして彼女は、2 万ドルを受け取らなかったばかりか執着の象徴である指輪を兄に返している。

Tina の剥き出しの物欲や激しい嫌悪感によって壊されていたかに見えた兄と妹の関係が、Isaac も Tina も自ら金や指輪を差し出す行為によって、物欲のくびきから解放され深い兄弟愛で満たされ、涙の表出という感情の極みの中で修復されたのである。

その場面を回想しながら Braun は、改めて感情について巡らす。

そして Braun 博士は、激しく心を揺すぶられて、感情とはなんなのかをつかもうとした。感情など何の益があるというのか！何のためにあるのか！だから今は誰も感情など持ちたいとは思わない。おそらく冷たい視線の方がましなのだ。生についても死についても。視線の冷たさは、内部の熱の度合と釣り合ったものになるのだろう。しかしいったん人間とは何かを把握し、人間は人間的であり、そうした激情を通して人間になるのだと言うことを把握してしまった今となっては、悪用し弄び不安ゆえに邪魔をし、大声を立ててありのままの感情のサーカスをするのだ。(80)

彼は、いとこ達が繰り広げた「ありのままの感情のサーカス」を目の当たりにし、感情こそが人間の本質と結びついていることを、悟ったのである。

語り手である Braun 博士は、科学者として旧世界の生き方、ユダヤ系移民に多くみられる感情過多に嫌悪感を抱いていた。自ら科学者であり現代的視点を持つ Braun 博士に、現代に迎合しながらも古いしきたりに従って生きる二人のいとこの生き方を回想させることで、彼らに対する深い理解と愛情を確認させるだけでなく、人とは感情のサーカスを繰り広げながら生きる定めにあると悟り、自身の生き方を再考する契機ともなっている。その結果「誰のことも愛さない人間だと時々言われた」(46) 彼が、“the old system” に従って生きていた二人のいとこ、とりわけ Isaac に対する深い愛情を吐露するように変化したのである。

“the old system” を求めて

通常アメリカ社会で成功を収めれば、富の入手と反比例して宗教離れが進み世俗化する傾向にあるところ、Isaac の場合には、「さらに古風」(60) になっていくことが物語の中で繰り返し強調されている。しかし「世の中は彼が要求した通りに動いており、このことは彼がしかるべき場所で正しい要求をしたことを意味している」(61) と書かれているように、彼が世の流れか

ら取り残されることはなく、そのことは彼の経済的な成功や社会的信頼によって示されているといえよう。

Isaac の場合、「人生に対する読みが形而上学的に正しいか、旧約聖書、タルムード、ポーランド系アッシュケナージの正統性(正統派的信念)が抗しがたいものであることを示している」(61) というようにユダヤ教やそれに則った古風さへの回帰が一層明確化し、しかもそのことが、「アメリカでは、旧世界の悪弊は直された。アメリカは歴史的矯正を施される国になるよう定められていたのだ」。そして「物質的なものももっとも重視された。しかし最大の業績は精神によってなされたのだ。そうでなければならなかった。そういった人々は正かったのだ」(87) と語られているように、現代的な生き方の妨げにはならないことが示唆されているように思われる。

“Kiernan は、Braun 博士が、” the old system” に「なぐさめ」を見いだしていたと述べているが、なぐさめ以上のものがありそうである。新しい時代に適合するために、“the old system” から脱却しないといけない部分も当然あるが、感情というユダヤ民族を特徴付けるとも言える特質を大切に、家族愛と深い信仰に根ざした古い伝統を守りながら生きるという “the old system” に従った生き方にこそ、逆に現代を生き抜く道が示されているといえるのではないだろうか。

生と死の物語ともいえるこの作品中で、Braun 博士は、60 歳を迎えたものの「死への道筋を知っていた。自分もまもなく逝かねばならない。だが、知っているだけで、まだ今は感じてはいなかった。死はまだ遠くにあった」(79) と死の予感すらしていなかったが、二人のいとこをあの世に送り出し今度は自分が逝く番であることを意識し、物語の最後に「なぜ生があり、死があるのか」(81) という普遍的な問いに行き着く。そして閉じられた Braun 博士のまぶたに、「分子プロセスにも似た黒の上に赤が乗っているもの—存在の唯一の真の先触れ」(81) が浮かぶ。黒と赤は CPK 配色を示しており、人体を構成する重要な要素である酸素と炭素を示していると考えられよう。彼は科学者らしく分子の集合体として人を理解し、さらにこれを「何十億年もの昔、大いなる生み出す爆発によって外に向かって放り出された」星くずというビッグバンのイメージと重ねている。人間の生と死の問題は、分子レベルに分解され、その上で宇宙の生成という圧倒的大きなスケール上に置かれたときにその意味を失う。ここで彼は、“Leaving the Yellow House” の Hattie とは異なる科学者らしい思考で、自らの死という問題に対処したと言えよう。

参考文献

- Bellow, Saul. *Mosby's Memoirs and Other Stories*. 1969. New York: Penguin Books, 1977.
- Bloom, Harold, ed. *Saul Bellow's Herzog. Modern Critical Interpretations*. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Dutton, Robert R. *Saul Bellow* Revised Edition. Boston: Twayne Publishers, 1982.
- Fuchs, Daniel. *Saul Bellow: Vision and Revision*. Durham: Duke University Press, 1984.
- Glenday, Michael K. *Saul Bellow and the Decline of Humanism*. London: Macmillan, 1990.
- Kiernan, Robert F. *Saul Bellow*. New York: A Frederick Ungar Book, 1989.
- Rodrigues, Eusebio L. *Quest for the Human: An Exploration of Saul Bellow's Fiction*. Lewisburg: Bucknell University Press, 1981.
- 渋谷雄三郎, 『ペロー —回心の奇跡』冬樹社, 1978.
- 半田拓也監修, 日本ソール・ペロー協会編集 『ソール・ペロー研究—人間像と生き方の探求』大阪教育図書, 2007.